

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）最終章

－発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場 in Tokyo－

山口大学

林 透・YU-AP学生スタッフ

1 プロローグ

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）は、「①ALポイント認定制度によるアクティブ・ラーニング推進」「②直接評価・間接評価活用による学修成果可視化」「③教職学協働による教育・学修環境充実」を進めるとともに、大学間連携・高大連携・社会連携を通して、成果発信・共有に取り組んできました。本学の教育理念「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」をキーコンセプトに掲げ、個人の教育観・学修観を尊重しつつ、時代の新たな要請に対応するため、多様なメンバーが集まる場づくりにより、大学教育の「変化」の創造に努めてきました。

そんな取組も、いよいよ、ゴールが迫っています。YU-AP事業6年間の物語（ストーリー）を振り返りながら、第1章・第2章・第3章、最終章という形で振り返りたいと思います。

2 第1章「“スズメの学校”から“メダカの学校”へ」

YU-AP事業の出発時に最も大切にしたことは、大学教員・大学職員・学生が協働しながら事業に取り組むことだったと思います。2015年3月に開催したキックオフシンポジウムにおいて、富山大学橋本 勝 教授（YU-AP事業アドバイザー）から「教育は『授ける・受ける』ものから協働で創るものに変化しています。というより、教育とは本質的にそういうものです。言い古された言葉ですが、『スズメの学校』から『メダカの学校』へ」というメッセージをいただきました。

3 第2章「ボーダーレス・キャンパス」

「ボーダーレス・キャンパス」という言葉は、2017年3月に本学にて開催した全国学生祭典『学生FDサミット2017春』で掲げたメインテーマでした。全国から約300名の学生・教職員が本学に集まり、「教室内での学び」と「教室外での学び」について議論し、大いに白熱しました。このイベントはYU-AP事業前半期のクライマックスでした。学生の属性だけでなく、学生の学び自体が多様化する中で、教室内外の学修成果の価値について発信できたことは大きな成果でした。

4 第3章「学び合い（共育）」

YU-AP事業後半期では、教職学協働の成果を基礎に、大学間連携・高大連携・社会連携による学び合いを大切にしてきました。特に、アクティブ・ラーニング型授業設計やループリックによる学修評価では、高校の先生方との学び合いの機会が増えました。さらには、学生の学修成果を眺めながら、高校の先生方や企業の方々との学び合い（チューニング）にも着手しました。YU-AP事業をエンジンに、多様なステークホルダーとの対話の機会が増え、地域の教育力の底上げに繋がりがつつあることは当初の想定以上の展開でした。

5 最終章（エピローグ）「教育成果と学修成果」

YU-AP事業の最後を締めくくるのは、「教育成果と学修成果」です。

山口大学における「組織的なアクティブ・ラーニング推進による教育成果とは？」「教学マネジメントを通じた学修成果の把握や可視化とは？」を紹介しながら、ご参加の大学関係者（教職員・学生）、ステークホルダーとともに、意見交換をしたいと思います。